

住井すゑとその文学の里(五十九)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

『橋のない川』の構想と題名

住井すゑ没後の平成15年(2003年)に北条常久著による、住井すゑの生涯に初めて本格的に迫った書き下ろしの評伝『橋のない川 住井すゑの生涯』が風濤社から発刊された。

それによれば、夫の犬田卯が没した翌年、昭和33年(1958年)のことだった。住井は、このごろどうしたものか、牛久沼に沈んでいく夕日が、故郷大和(現奈良県)の二上山に沈む夕日を思い出させるのだった。しかし、そこに現れる顔は奇妙なことに父や母でなく、田原本女子技芸学校の部落の少女の肩を落として寂しげな面であつた。



昭和34年1月2日早朝、新地地先牛久沼から、城中、根古屋、遠山方面をのぞむ。

毎日出版文化賞受賞の際に、娘増田れい子を書いた『時の人』で、住井は「結婚や家庭は手段であつて、このすゑは別にある」という大胆な発言をしていたが、この年56歳の彼女は、大和を舞台に自分の納得する作品を書く、戦いの時が来たことを悟つたのだつた。

住井は、へ田原本町の技芸女学校の二人の部落の娘をいよいよ自分の作品のテーマにすえる時が来た」と闘志を漲らせるのであつた。

もう一方、平成7年(1995年)に岩波書店から出版された、92歳の住井と娘増田れい子との対談集『住井すゑ わが生涯(生きて愛して闘つて)』がある。

次にその中の『橋のない川』の対談の条を引用してみる。

増田 第一部は初版が1961年(昭和36年)9月、以来、1992年(平成4年)9月に第7部が出てロングセラーになったわけだけど…。文庫本も入れると…。

住井 公称500万とっているん

だけどね。イギリスのジャーナリストが取材にきたとき、500万の本が売れば、言いたいことを言えますね、あなたが言いたい放題言えるのは、その本が売れているからですよ、なんていわれましたね。いまイタリヤで翻訳中です。

増田 翻訳はもうすでに中国語訳、英訳それにフィリピンのタガログ語訳が出てますね。

住井 いちばん問題にしないのは日本ですよ(笑)。

増田 この『橋のない川』というタイトルは、どこから生まれてきたか、どういふふうにしてつけたか興味のあるところ。ひよつと思いついたのか、ある朝、筆の先からしたりおちたのか。

住井 そうじゃない。被差別部落との関係を文字にあらわしたら、『橋のない川』になるんだよね。行きたいけれども、川があるんでおたがい渡れない。橋がないからこつちへこつちへ行けないし、むこうへ行けないね。それは理屈抜きで、一枚の絵だな。

増田 頭のなかに子どものうちからずっとその絵があつて…。

住井 O川、Sという川があつて、あいだをわけて流れるという構図になつているのね。

増田 現実にもその大和盆地を流れる川によって隔てられ、川のむこうは被差別部落ということなのね。

住井 そう。たがいを位置づけるのが川の流れ。だからひとりで『橋のない川』という題は出てきたのね。増田 書き出しがそうですものね。橋の夢を描きますよね。夢のなかで、川を渡れないで土手を走るわけだからね。いい題よね。題ができたとき、この小説は『できた!』つていう感じしなかつた?

住井 もうタイトルができたときに作品はできたと思つた。

増田 そういふものなのよ。いいタイトルがついたときは、『できた!』つて感じがするものよ。だれの耳にも目にも頭にもすつと入るところがいい。

住井 生活なの。

増田 なるほど。みんな橋も知つている、川も知つているわけね、ひよようにイメージしやすいタイトルなの。しかも大きい。『渡れない海』というのだったら、これはあたりまえよね。ドーバー海峡を泳いで渡つた人はいるけど、それは何百万人にひとりしかできない。でも、川だったらほとんどは渡れるはずなのに、それが渡れない。橋がないというのは、実に痛切なことなのよ。

住井 部落解放同盟の集會に出て、帰つてきて書きはじめた。だから1958年、昭和33年の秋のスタートね。